
水遊び

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水遊び

【Nコード】

N8182K

【作者名】

翡翠

【あらすじ】

真夏の夕暮れ時、5歳の息子が元気に遊んで帰ってきた。母親は、一人で入浴させるが……。純粋な子供が、友達に言われた一言。一体、息子にどんな恐ろしい事が起こるのか？

蝉の啼き声が、一層暑さを感じさせる夏。

団地の小さな公園からは、元気な子供達の声が響いている。

開け放った窓から、階下を臨めば、子供達の元気に遊んでいる姿を目にする事ができる。

母親達は時折、窓辺に姿を現し、ベランダ越しに我が子の姿を探す。どんなに暑くても、子供は元気だ。

汗だくになって走り回る。

頼子も、同様にベランダから我が子、健史の姿を眺めていた。

「子供って、本当に元気ね。」

そんな言葉が口から出る。

それにしても、今日も暑い。

ノースリーブの肌が、じりじりと焼けるように熱い。

髪をアップにしているが、それでも項に流れる汗が気持ち悪い。

頼子は、部屋に戻ると扇風機に当たり、風を全身に受けた。

生暖かい風が、頼子を包む。

時計を見ると、そろそろ4時を回る。

「夕飯の支度でもするかなあ。」

自分を元氣付けるように、扇風機から離れた。

台所に立つと、風の通りが悪く、汗が噴出してくる。

冷蔵庫を開け、冷氣を受ける。

庫内の温度が上がる。

「いけない。こんな姿を健史に見られたら、まねされちゃう。」

とは言うものの、気持ちがいい。

「何にしようかなあ・・・」

冷蔵庫の中を覗きながら、野菜を手にする。

必要な材料を取り出し、流しに置く。

「ああ、そうか。お風呂を沸かしておかないと。」
健史の姿が、蘇る。

汗だくになって、走り回っていたのだ。

帰ってきたら、最初にお風呂に入れて、さっぱりさせなくてはならない。

頼子は、お風呂場へ向かった。

とはいえ、団地の狭い空間だ、お風呂場は台所の隣にある。

風呂釜のガスを点火し、棚から健史のおもちゃを下ろす。

まだ、5歳の息子を一人でお風呂に入れる為には、おもちゃは必要な存在だ。

お風呂で遊んでばかり居られても困るが、夕食の支度をしているうちに、お風呂に入れてしまいたい。

おもちゃを眺めながら、

「しょうがないよね。」

と自分に言い聞かせる。

「まだ、5歳だもの。一人で入れるだけ、凄いのよ。うん。」

子供を生んでから、自分自身を納得させる事が上手くなった。

子育てとは、忍耐と妥協だと、頼子は思っている。

イライラした所で、相手は子供なのだ。

台所へ戻ると、出した野菜を洗い、包丁を手取る。

それでも、何を作ろうかと考えている。

余りにも暑くて、できることなら火を使いたくないのだ。

それでも、火を使わずに済む料理ばかりを並べるのにも限界がある。

「冷奴・・・は、昨日出したよねえ。」

じっと、野菜を見る。

「しょうがないな、炒めるか。」

等と、いろいろと考えていると、玄関が開き、元気な健史の声が聞こえてきた。

「ただいまー！ ママー！ ただいまー！」

バタバタと足音が部屋中に響く。

「お帰り。」

振り向くと同時に、健史が頼子の足にしがみついていた。まだまだ小さいのだ。

頼子は、体をねじり健史を見下ろした。

その姿は、汗びっしょりで、頭に触れるとシャワーを浴びたかのように、濡れていた。

「タツ君、お風呂入ろうか？」

「お風呂？」

健史の瞳がキラキラと光る。

今度は水遊びが出来るぞ、という悪戯そうな目だ。

「うん、お風呂よ。ぬるいから、ちょうどいいでしょ。」

「わーい！水風呂ー！」

完全に水遊びと勘違いしている。

頼子は、困ったものだと思いつつも、可愛い健史を怒る気にはなれずに、頭を撫でた。

「ほら、入っておいで。ママはここで、夕飯の支度をしてるからね。」

「うん！ぼく、一人で入れるよ！」

元気に、洋服を脱ぎ出す。

「タツ君、洋服はお風呂場で脱がないと、だめよ。」

と、小さく怖い顔をするが、本気で怒っているわけではないので、健史は動じない。

子供は親の心の動きを熟知しているようだ。

健史は、裸になるとお風呂場へと飛び込んだ。

ガラガラガラと、風呂の蓋を開けている音が聞こえる。

何度も教えて、やっと風呂の蓋を丸めるという事を覚えたのだ。覚えてしまえば、それすら遊びになってしまう。

間もなく、ザバーンと勢いの良い水の音が聞こえる。

（飛び込んだな！）

どうも、プールと間違っている感があるようで、浴槽にそつと入るという事が、出来ない。

（そのうち、できるようになるでしょ。……風呂桶が壊れる前にお願いたいわね。）

フライパンに火を点け、油を注ぐ。

間もなく、油が熱くなり、肉や野菜が投入されるのを待っている。

風呂場からは、健史の歌が聞こえてくる。

TV番組の何とかレンジャーの主題歌だ。

毎週楽しみにしているようだが、頼子はいくら見ても覚える事ができない。

これが、レッドで強いんだよ。

と、健史は話してくれるが、「そう」と笑顔で答えるのが、精一杯だ。

お母さん達の中には、子供の好きな番組は、全て覚えて子供と話が合うように、努力を重ねている人もいるが、頼子にはそこまではできないと思っていた。

健史のおもちゃ箱は、何とかレンジャーで溢れ返っているが、どれと同じに見えるのだ。

時々、女の子だったら、おもちゃも色とりどりで楽しいだろうな、と思う事がある。

（次は女の子がいいなあ。）

とはいえ、決して、健史が女の子だったら良かったのに、と思っているわけではない。

健史は健史なのだ。

お風呂場が、静かになった。

頼子は、フライパンの中身を皿に移すと、棚に置いて、風呂場を覗いた。

折りたたみのドアを開けると、健史が真剣な顔で洗面器に石鹸を沈めている。

（ああ……又、やってる。）

「健史！ダメ！」

健史の体が大きく跳ねる。

振り向いた顔は、不味い所を見られたという、妙な表情だ。

「ちゃんと体を洗いなさいよ。」

「はい。石鹸さんがね、お風呂に入りたいて、だから、お風呂に入れてあげたんだよ。」

（そんな分けないでしょ。）

「じゃあ、今度は石鹸さんがダイエットしたいって言ってるから、タオルに塗り塗りしてあげて頂戴。」

「ダイエットお？」

「痩せたいんだって。」

「ママみたいだね。」

頼子も、女性である。

常に、食べては明日からダイエットよと、夫に宣言しているのだ。夫は、

「痩せたいって言う人に限って、ダイエットはこれを食べてからって言うよね。」

と笑っている。

夫にしてみれば、今の頼子に不満はないのだから、ダイエットと言いながら、食べていても構わないのだ。

頼子は、

「ああ、そうね。そうそう、ママみたいに、ダイエットよ。」

「うん！」

健史が石鹸をタオルに塗りつける。

泡が立てば、嬉しそうに体に擦り付ける。

洗うというよりは、擦り付けているように見える。

（まあ、よしとしよう！）

頼子は、風呂のガスを止めると台所へ戻った。

（野菜炒めと・・・何にしよう。）

再び冷蔵庫をあける。

涼しい。

早く夕飯の準備を終わらせて、自分も風呂に入り、さっぱりしたいところだ。

（もう、何でもいいや！）

冷蔵庫から、ちくわを取り出し、きゅうりとチーズを出す。

何でもいいと言いながらも、やっぱり火は避けたかった。

（あ、そうだ！頭を洗うように言わなくちゃ。）

頼子は、再び風呂場へ足を向ける。

しかし、いくらぬるいとはいえ、風呂場のドアを開ければ、熱気が飛び出してくる。

汗が首筋を流れる。

ドアを開けずに、声を掛けることにした。

「タツ君、頭も洗ってね。」

「はい」

どこまで分かっているのか、とりあえず返事は良い。

頼子は、料理の続きを終わらせようと、包丁を握った。しばらくは料理に集中だ。

とにかく、早く終わらせて、ゆっくりしたかった。

手早く料理を済ませ、汚れた物を洗う。

水が気持ちよく、洗い物だけは、のんびりとこなした。

台所が片付くと、もう一度健史に声を掛ける。

「ちゃんと洗ってる？」

「うん！」

「頭洗った？」

「洗ったよ！3回も洗ったんだよ！」

頼子の脳裏に、シャンプーの残量がよぎる。

ため息が出る。

自分が楽をする事を取るか、シャンプーの使用量を取るか。

微妙な選択だ。

しかし、今更何を言っても、きっとシャンプーは見事に減っている

だろう。

頼子は諦めて、部屋に入り扇風機に当たった。
生き返る。

少しは汗が引くような気がする。

TVを点けると、ドラマの再放送が目に残った。

頼子は、扇風機を自分に向けたまま、定位置に座るとぼんやりとTVを眺めた。

どの位時間が過ぎたのだろうか、10分か、はたまた20分。

いや、もつとなのかもしれない。

気が付けば、夕闇が迫ってきている。

（いけない！健史！）

頼子は、風呂場の音に耳を澄ました。

すると、かすかに水の音が聞こえる。

何かを洗っているような、ジャブジャブという音。

（又、石鹸で遊んでるのかな・・・石鹸が減るよお。）

頼子は、健史に注意しようと立ち上がった。

風呂場へ向かい、ドアを開けようと思うが、躊躇われる。

せっかく、のんびりと扇風機に当たって、大分汗が引いたのに、ここで又熱気を浴びるのかと思うと、ドアを開けたくないのだ。

蝉の声が、まるで部屋の中で、啼いているのかと思うほどうるさく響く。

そろそろ8月も終わるというのに、一体いつまで暑いのだろう。

ため息を付きながら、頼子はドアを開けた。

「健史？」

「なあに？」

「何洗ってるのかな？早く出なさい。」

「うん、今日ね、汗をいっぱいかいたから、洗ってるんだよ。」

「偉いね。で、何を洗ってるのかな。」

「ゆう君がね、汗をかいた時は、ここも洗わないとだめだって、教

えてくれたんだ。」

そういつて、丸い小さなボールを二つ突き出した。

健史は、目を小さくして笑っている。

笑うと、目が線になる。

可笑しなところが父親に似ている。

しかし、その笑顔が好きなのだ。

頼子は、突き出された小さなボールに視線を向けた。

（何？これ）

（拾ってきたのかしら。）

（ボール？スーパーボールかな？）

それは、石鹼の泡でよく分からない状態だ。

しばらくじっと見ていると、泡が切れ、ボールの正体があらわになった。

それは、白く、まるで……。

「タツ君、それ、なあに？」

「ママ、知らないの？」

「何が？」

「汗をかいたらね、ちゃんと外して洗わなくちゃいけないんだよ。」
そういうと、健史は目を開いた。

そこには、眼球がなかった……。

《完》

（後書き）

いかがでしたでしょうか・・・？今回は短編で仕上げてみました。感想を書いていただけると嬉しいです。では、次回作は・・・

・【鏡】・・・。明日より、連載を開始します。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8182k/>

水遊び

2010年10月15日19時12分発行